様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０２９０

研究課題名（和文）「広い」太平洋文学における白人表象についての研究

研究課題名（英文）A Study on Literary Representation of European Settlers in the Extended Pacific Region

研究代表者
山本　卓（Yamamoto, Taku）

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：１０２９３３２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,100,000円、（間接経費）　630,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、太平洋島嶼作家にニュージーランドのマオリ作家を含めた、「広い」太平洋文学作品における白人の描かれ方をに注目し、太平洋の作家が、太平洋世界を長らく一方的に記述する立場にあったヨーロッパ人を、文学作品の中でどのように解釈し、加工し、表象するかということを通時的、かつ共時的に検証した。また、「さらに広い」太平洋文学として、日本の植民地小説も視野に入れて、包括的な他者表象分析を試みた。

研究成果の概要（英文）：This project examines the diachronic and synchronic differences in literary representations of European settlers in the extended Pacific region including New Zealand. More precisely, the study explores the way indigenous writers from the areas, which has long been historicized and imagined only by Europeans, interprete, process, and represent the white race in their works to create a new history of their own. The project also aims at the comprehensive study on the far-extended Pacific literature such as Japanese Nanyo stories.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学　英米・英語圏文学

キーワード：太平洋文学　ポストコロニアル批評　植民地主義　マオリ文学

１．研究開始当初の背景

本研究は、平成 20~22 年度に交付を受けた基盤研究(C)「ヨーロッパの南太平洋像の変容と、現代太平洋文学における主体形成についての研究」を発展させたものである。この研究においては 18 世紀までにさかのぼり、探検家、宣教師、作家、芸術家が伝える太平洋像を、西洋がどのように受容し、後世に継承したかを探った。太平洋世界は、ヨーロッパとの距離と相まって両者の文明水準の著しい不均衡のために、現地からの反論を受けることなく、西洋の視点から一方的に「語られる」対象であった。そして、その過程で生み出された太平洋像は 20 世紀の映画や観光産業に継承される。前回の申請では、こうした歴史状況を文学テクスト読解の背景として踏まえ、20 世紀半ばに登場する太平洋文学を、西洋イデオロギーからの脱却を試みる主体の形成という見地から分析した。

ヨーロッパにおける太平洋像については 1990 年代以降、太平洋研究の主要なテーマの一つとなっており *Far-Fetched Facts* (Neil Rennie. Oxford UP, 1995)、*Representing the South Pacific* (Rod Edmond. Cambridge UP, 1997)、*South Sea Maidens* (Michael Sturma. Greenwood, 2002)などが代表的な先行研究として挙げられる。しかしながら、こうした研究書はいずれも「語られる」対象としての太平洋を扱っており、西洋人へ向けられた現地の人々のまなざしは論じてこなかった。その一方で、同じく 1990 年代より、西洋に対して太平洋からの声が上がり始める。*A New Oceania* (Hau'ofa ed. USP, 1993)、*Inside Out* (Hereniko and Wilson eds. Rowman & Littlefield, 1999)、*We Are the Ocean* (Hau'ofa. U of Hawai'i P, 2008) はいずれも、島嶼出身の研究者が自分たちの文化に対する考え方を論じたもので、ヨーロッパが与えてきた太平洋観へのアンチテーゼとなる。本研究はこうした傾向を、白人表象に着目して太平洋文学の中に読み解くものである。

たとえば、太平洋文学の代表的作家 Albert Wendt の作品を通時的に読んでみると、その中には明らかな白人描写の変化が看取できる。初期の作品において現地の人々に経済的、文化的劣等感を意識化させる存在として登場する白人は、過度に批判され戯画化される一方で、1990 年代以降の作品ではより対等な関係を構築できうる存在へと姿を変えていく。こうした変化には、東西冷戦の終結、世界の急激なグローバル化、第三世界の台頭、インターネットの普及による情報獲得の平準化、といった要因が大きくかかわっており、地理的にも歴史的にも世界の周縁に位置づけられた太平洋世界のあり方の変化とも呼応する。そして、作品における白人像の変化は、マオリ作家を含めた「広い」太平洋文学においても同様に見られるのである。

２．研究の目的

本研究は、太平洋の英語圏文学における白人の表象に着目し、ポリネシアやマオリの作家が彼らの属する民族の主体を問い直す際に行う、白人像の書き換えや転倒を歴史的、かつ共時的に検証することを目的とする。さらに、広い意味での太平洋世界には、ポリネシア地域のみならず、ミクロネシアやその延長として日本までもが射程に入る。

研究対象は、旧植民地の中でも多くの芸術家を輩出するフィジー、サモアなどの島嶼地域の作家、および、現在の太平洋で文芸活動がもっとも盛んなニュージーランドのマオリ作家による文学作品で、現地人による文学活動が起こった 1960 年代以降のものとする。なお、本研究ではテクスト中の白人表象に焦点を当てるため、原則として非ヨーロッパ系作家によるテクストが研究対象となる。

太平洋文学の定義は曖昧で、主にポリネシア系作家に限定する狭いものもあれば、ミクロネシアやニュージーランドを含めたオセアニア地域全般の文学を指すこともある。本研究でニュージーランドを含めるのは、太平洋諸島の経済援助において彼の地が中心的な役割を果たしていることに加え、Albert Wendt に代表される島嶼作家の多くがそこを活動拠点に定めていることが挙げられる。さらに *Pacific Islands Writing* (Michelle Keown. Oxford UP, 2007)の副題にも示されているように、近年マオリ文学をニュージーランドに限定するのではなく、太平洋文学の一部として考えるようになってきた。実際、Wendt が編んだ太平洋文学アンソロジー *Whetu Moana* (2003)には、島嶼作家とともに多くのマオリ作家の作品が収録されている。

具体的な検証作家として、島嶼出身の作家においては Albert Wendt (小説、詩、戯曲、評論、絵画)を中心に、Epeli Hau'ofa (小説、評論)、Larry Thomas (戯曲)、Vilsoni Hereniko (戯曲、映像作品)、Sia Figel (小説、詩)を考えている。Wendt は 50 年にわたって作家活動を継続しており、彼の作品や物語に対する哲学は、太平洋文学における白人表象の歴史を探る点できわめて有効である。Wendt と同時代人である Hau'ofa や Thomas は Wendt とは文学に対する考え方が異なっているため、彼の立場を相対化するために検証する。彼らの次世代にあたる Hereniko と Figel は、植民地からの独立後に生まれた作家であり、非ヨーロッパ人へのまなざしについての世代間の差違を探るための対象となる。

一方、ニュージーランド作家では、マオリ文学を代表する作家 Witi Ihimaera (小説、評論)を中心に、彼とほぼ同時代に執筆活動を開始した女流作家 Patricia Grace (小説、児童文学)、自ら社会的逸脱者としての青年期を過ごした Alan Duff (小説)などを取り上げる。

とりわけ Ihimaera と Grace は 1970 年代に執筆活動を開始しており、彼らの活動はマオリ文学の歴史と密接にかかわる。また、彼らは小説だけではなく、小作品であるが詩も編んでおり、彼らを通してマオリ文学の系譜を包括的に分析することができる。なお、上記の作家にはヨーロッパ系とマオリの混血も含まれるが、作品のテーマや作家の主体のよりどころを考慮し、非白人作家として扱う。

長らく西洋によって一方的に記述されてきた歴史を、こうした作家たちがどのように書き換えようとするのかを、作品の白人表象をとおして検証することが本研究の目的になる。

３．研究の方法

本研究は 3 年計画とし、最初の 2 年間を、ニュージーランドを含めた太平洋世界に関する文学作品と歴史テクストの読解に充てることにした。その間適宜、海外での資料収集を行う傍ら、両者の相関性について分析し、最終年度において包括的な見地から、現在の「広い」太平洋文学の白人表象をまとめるというアプローチを採った。

第一段階として、太平洋文学の代表的作家であり、小説、詩、戯曲、評論といった文学領域から絵画制作にいたるまで多岐にわたる活動を行っている Albert Wendt を中心に研究を進める。彼を足がかりに、Epeli Hau'ofa や Larry Thomas、Vilsoni Hereniko、Sia Figel など、Wendt と同時代の作家、また彼に続く作家を広く取り上げ、太平洋文学における Wendt の位置づけの相対化を試みる。

第二段階はマオリ文学作品の読解である。その際の手法としては、島嶼文学作家に用いた、(1)中心研究対象作家の確立、(2)周辺作家を通した相対化、(3)関連資料を用いた歴史的なテクスト分析、が挙げられる。マオリ文学が太平洋文学として扱われるようになるのは、今世紀に入ってからのことであり、まずは 1990 年代以前のマオリ文学の系譜と傾向を確認する必要がある。

島嶼作家の Albert Wendt に相当するのが、マオリとしては初めて小説を出版した Witi Ihimaera である。彼の *The Matriarch* (1986) と *The Dream Swimmer* (1997)はマオリの視点を通した白人像を作品テーマの一つとして扱っている点で、本研究が最初に着手すべき作品である。これらのテクストを軸として、*Tangi* (1973)といった初期の作品、他方、*The Rope of Man* (2005)などの近年の作品へと通時的に読解することで、彼の作品におけるヨーロッパ人像の変遷を探ることになる。さらには、Patricia Grace、Keri Hulme、Alan Duff などの作家の作品を併せて読み、Ihimaera の白人観を相対化する。

それらの作業と並行して、マオリの歴史をマオリ/ヨーロッパ系入植者の対立に着目して分析する。マオリ文化の復興はマオリ系作家の台頭と密接にかかわっており、文学作品を論じるにあたって、当時の主要な議論や国民意識、マオリの主張を詳細にわたって調べる必要が生じるため、ウェリントン大学とオークランド大学でマオリ関係資料を収集する。

最終段階は、それまでに独立して行ってきた島嶼作家テクストにおける白人像と、マオリ作家によるヨーロッパ系ニュージーランド人表象を比較、検討する過程である。ここで注目すべき事項は、島嶼地域とニュージーランドとの地域性の差異とその変化である。白人の土着民族の対立という点では、白人文化への強制的な同化をそれほど受けなかった島嶼民族が描く白人像と、土地を収奪されヨーロッパ化を強いられたマオリの目を通したそれとの間には、かなりの違いがあることは容易に想像ができる。しかしながら、20 世紀後半のマオリ文化の公的な認知や、20 世紀末以降の移民の増加、とりわけ島嶼国やアジアからの移民の急激な増加によって、ニュージーランドの民族地勢図が急速に塗り替えられつつあり、それに伴って、島嶼作家とマオリ作家の境界が曖昧になってきている。文化背景の共有領域が拡大した二種類の作家群が、21 世紀において白人/現地人の構図をどのように捉えているのか、どの領域を共有し太平洋民族として白人を眺めるのか、その一方で、民族固有の視点をどのように保持し続けるのかを同定することが、最終年度の主要な目標である。

こうした検証の一方で、本研究においては「さらに広い」太平洋地域文学として、日本の植民地文学、とくに南洋を題材とした文学の検証も行いたい。西洋の植民地主義の圧力を受けつつも、アジア地域では植民地国家として台頭した戦前の日本のありかた、さらには当時の南洋の文化表象は、本研究が主に扱う南太平洋地域の抑圧者/非抑圧者の二項対立に、異なる視座を提供する。

４．研究成果

平成 23 年度は太平洋文学の代表的作家 Albert Wendt を中心に研究を進めた。彼を起点に、Epeli Hau'ofa や Larry Thomas、Vilsoni Hereniko、Sia Figel など、Wendt と同時代もしくは彼に続く作家を広く取り上げ、太平洋文学における Wendt の位置づけを相対化したが、その過程で彼の創作活動の場の変遷が重要な検討項目として浮上した。Wendt の作風の変化を辿ると、居住地の移動や旅行といった彼を取り巻く状況の変化がかなり直接的に作品に反映されていることが認識できるのである。

なかでも *Black Rainbow* (1992) は、太平洋の島嶼作家からニュージーランドにおけるポリネシア系作家への Wendt の変化を刻

印する作品として重要であり、その論考をまとめたものが初年度の成果である（「他者のいない主体:アルバート・ウェントと『黒い虹』」）。

明確にポリネシア人とは言及されない主人公や、ポストモダン的な手法による重層的な物語構造は従来の彼の物語には見られない要素である一方で、土着性への強いこだわりとポリネシア地域やマオリの神話世界を多用する表象方法は、この作品以降の 1990 年代や 2000 年代に出版された伝統回帰の色の濃い Wendt 作品を暗示する。

本研究における *Black Rainbow* のもっとも重要な意義は前述したポストモダニズム的な語りである。Wendt は Janet Frame をはじめとするマオリ作家の作品イメージや、アルゼンチン出身の作家 Borges の短編を明示的に参照しつつ、物語の後半部では Wendt 自身の作品に言及するといった、自己撞着的な語りを用いる。物語の円環構造と自己言及的な語りによって、作家が最終的に他者を肯定/否定することで成立するオリエンタリズム的な構造を超越しようと試みるのである。また、*Black Rainbow* におけるポリネシア的なアイデンティティの提示が、抑圧者としての白人の単純な否定に依拠していないことも注目すべきであろう。作品における白人は直接的な批判の対象としては扱われず、必要に応じて共犯関係を作る存在として描かれるのである。こうした白人との交渉は、それまでの Wendt 作品とは一線を画す一方で、次年度のマオリ作品の読解のひとつの指標となった。

他方、平成 24 年度はウェリントン大学とオークランド大学において資料の収集を行いつつ、マオリ文学の読解を中心に研究を進めた。Ihimaera を中心課題とし、マオリ民族への歴史・文化背景と作品モチーフとの相同性・相違性を探る一方で、前年度の課題として検証した Albert Wendt などの島嶼作家が問題化するテーマとの比較検討を行った。その結果、物語の白人表象について島嶼作家とマオリ作家との間にはかなりの差が確認された。たとえば Wendt の作品全般を見渡すとき、マオリ作家の扱い方に比較すると白人に対して批判的な言説が目立つ。経済格差によってもたらされる文化的な侵入に対して非常に敏感なのである。他方、マオリ作家は現代マオリ民族における白人文化の影響に対して島嶼作家ほど批判的姿勢は明確にせず、所与のものとして扱っている。ヨーロッパ系ニュージーランド人はマオリの土地簒奪という脈絡では批判の対象として現前化するものの、それ以外の場面では背景に隠れてしまうことが多い。「広い」太平洋文学という視点に立った場合、上述した差異を個々の作家の作風や歴史状況といった個別的な要因に還元するだけではなく、これからの太平洋世界における民族主体のあり方の徴候として包括的に扱う必要があった。こうした知見を踏まえると、環太平洋という「さらに広い」コンテクストも本研究課題の次のステップとして浮上した。

平成 24 年度は、計画段階では本研究の発展的な側面として考えていた「さらに広い」太平洋研究を先取りする形になった。Wendt とサモアによってつながり、また彼自身の作品の白人イメージにも強い影響を与えている Robert Louis Stevenson と、Stevenson が作り上げた太平洋世界を自身の作品世界へと昇華させた中島敦との関係を論じた考察を *The International Journal of Scottish Literature* に投稿した（“Appropriating Robert Louis Stevenson: Nakajima Atsushi and the Ideological Context in the Pre-War Japan”、受理済み、2014 年刊行予定）。この論考では、Stevenson の *Vailima Letters* を題材にした『光と風と夢』を中心に、中島が Stevenson の提示した太平洋像を、彼自身の南海イメージに照らし合わせて加工し、過去の作品テーマの延長線上に位置する一人の白人作家として表象する過程を論じている。本考察によって間接的に明らかになったのは、本研究が扱う島嶼作家およびマオリ作家による白人表象における歴史的脈絡の多相性である。作家は自らの置かれた歴史的な文脈を踏まえつつ、それを取り込みながらも独自の世界観を表象を試みる。中島の作品における自己言及性は、Wendt の作品と共鳴するし、当該年度に読解した Ihimaera の作品における作家の主体のあり方を検証する際の視座構築に貢献した。

平成 25 年度は、前年度の資料収集を補うためにハワイ大学マノア校で、太平洋関連の資料発掘を行った。その一方で、島嶼作家とマオリ作家が提示する白人表象の相同性、および差異を検証した。これによって浮上したのは、1990 年代以降の作品における女性の重要性である。とりわけ Wendt の *Ola* から *The Mango's Kiss*、*The Adventures of Vela* (2009) へと続く女性的な語りの系譜、Ihimaera による *The Matriarch*、*The Dream Swimmer*、*The Parihaka Woman* (2011) といったマオリ女性に焦点を当てた一連の作品群は、「広い」太平洋文学における男性的な力学への批判として読解することができる。また、Patricia Grace の *Tu* (2004) は、女性の視点から第二次世界大戦に従軍したマオリ部隊を描いたという点で、前述した男性作家による男性的な力学からの超越を補完・補強する作品として解釈できる。こうした女性性への希求は、ニュージーランドにおけるマオリ・フェミニズムとも深い関連があることも、ハワイ大学で収集した資料によって確認した。マオリ作家による作品の読解に予定した以上に時間がかかったため、当該年度中に包括的な論考をまとめることはできなかったが、目下 *Ola* を軸として、マオリ作

家による女性を主要人物に据えた作品における白人表象について考察した論文を作成している。

なお、前年度に執筆した Stevenson の表象検証をさらに進め、後期の南海冒険小説を読解する上で、ジャンル的に重要な作品となる *The Dynamiter* (1885)の考察を第 1 回ジョゼフ・コンラッド協会大会（平成 25 年 6 月、東京）において発表した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① Taku Yamamoto, "Appropriating Robert Louis Stevenson: Nakajima Atsushi and the Ideological Context in the Pre-War Japan," *The International Journal of Scottish Literature*, (2014), 査読有, 受理済

② 山本卓、「他者のいない主体:アルバート・ウェントと『黒い虹』」、『言語文化論叢』18 号、(2012)、109-127、査読無

〔学会発表〕（計 1 件）

① 山本　卓、「スティーヴンソンから読むコンラッド：『ダイナマイター』と『密偵』におけるテロリズム表象」、第 1 回ジョゼフ・コンラッド協会大会、2013 年 6 月 22 日、跡見学園女子大学（東京）

６．研究組織
(1)研究代表者

山本　卓（YAMAMOTO TAKU）
金沢大学・学校教育系・教授
研究者番号：10293325